

「源頼信頼義父子と馬盗人」〔『今昔物語集』〕

今は昔、京に源頼信といふ武將がゐた。東國に非常な名馬を持つ者がゐると聞いて、手を回して譲つて貰ふ事になり、使ひの者達が馬を引いて戻る途中、馬盗人がそれを見て、盗み取らうとしてつけ狙ふが、隙が無く、馬盗人は京迄ついて來て了つた。

頼信の子の頼義は、名馬が父の邸に入つたと知ると、譲り受けたと思つてやつて來る。父は子が「未だ云ひ出でぬ前に」心底を見抜き、明朝になつたら馬をよく見て、氣に入つたら引いて行くがよいと云ふ。

その晩、激しい雨音に紛れて馬盗人が忍び込み、馬を盗み去つて了ふ。「馬が盗られた」と廐うまやで誰かが叫ぶと、頼信は寝てゐる子に何も告げずに跳ね起き、矢を入れた武具を背負つて馬に飛び乗り、内心、これは東國の馬盗人がついて來て、雨音を幸ひ盗み去つたに相違ないと思ひつつ、關所のある逢坂山目指し唯一騎で追つて行つた。

廐の叫び聲を聞いた頼義も又、父の「思ひける様に思ひて」、父に「かくとも告げずして」、やはり唯一騎で追ひかけた。父は「我が子必ず追ひて來たるらむ」と思ひ、子は父が「必ず追ひてさきにおはしぬらむ」と思つて、共に懸命に馬を走らせたのである。

一方、馬盜人は逢坂山に至ると、逃げ果せたと思ひ、水溜りで音を立てながらゆつくり馬を歩ませた。水音を聞いた頼信は、暗くて頼義がゐるかどうかも分らないのに、「射よ、奴だ」と叫ぶと、その言葉が終らぬ裡に弓音がして、手應へがあり、やがて「馬の走りて行く鎧あぶみの、人も乗らぬ音にてからからと聞え」たので、頼信は「馬を取りて來よ」とだけ云つて、その儘歸途についた。

頼信は邸に戻ると何も云はずに寝て了ひ、頼義も連れて來た馬を郎黨に預けて寝て了つた。翌朝、頼信は頼義を呼び、「よく射たりつる物かな」などと云ふ事もなく、馬を引き出させ、褒美として子に授けたといふ。「あやしき者共の心つはものばへ也かし。兵の心つはものばへはかくぞ有りけるとなむ語り傳へたるとや」と、この一篇は結ばれてゐる。

「今昔物語集」第二十五卷本朝部に收められた話である。古代末葉から中世への變革期を描いたこの説話集の、平安朝の物語には見られぬ人間達の「野生の美しさ」（芥川龍之介）の魅力

もさる事ながら、勃興しつつある武士階級の「兵の心ばへ」の描き方が取分け私には印象深い。山路愛山は名著「源頼朝」に於て、武士は「當時の最も健全な階級」だつたと記してゐるが、當時の世人を瞠目かつ畏怖せしめた、頼信頼義父子の以心傳心の振舞は、T・S・エリオットが「文化の定義に關する覺書」に於て指摘する、文化の成長と存續に不可欠な「文化傳達」の問題を考へる上で頗る啓發的である。エリオットによれば、家族こそは「文化傳達の主たる経路」に他ならず、「家族がその役割を果さなくなると、吾々は文化の衰退を覺悟せねばならない」のだが、頼信頼義父子は武士文化の擔ひ手として、見事に「兵の心ばへ」を育て傳へる「役割を果」してゐた事になる。

遠い中世の武士の時代に限らない。塩谷贊は「幸田露伴」に、「露伴とその娘幸田文のことを言ふ人は、露伴の母の猷を持つて來て三代の美質を論ずる」が、猷の母には芳があつて、芳は「觸手光を生ずるほどの上手」で、拭いたり使つたりするものは磨き上げて「皆つややかに」なつたと書いてゐる。幸田家も數代に亙つて「文化傳達の主たる経路」たり得てゐた譯だが、さういふ「健全」な過去を鑑として、現代日本の「文化の衰退」を自覺する事こそが何よりの急務だと私は思ふ。

(日本古典文學大系二十五、岩波書店)